

参考文献及び引用文献

山形県『山形県史』六巻 漁業編 一九七五年

注(1) 拙著『日本蟹人伝統の研究』 法政大学出版局 一九九〇年

注(2) 平凡社「山形の地名」 『日本歴史地名大系』六巻 一九九〇年

注(3) 犬塚幹士「飛鳥のタコ漁」 『技術と民俗』(上) 日本民俗文化大系 小学館 一九八五年

(たなべ さとる 本学教授)



前掲地図のつづき (北の部分)
国土地理院発行 1:25,000

丙二八番地に在住の本間茂三郎氏（明治四〇年五月二五日生）からの聞き取りによるものである。

当時、話者は山形県浅海漁業連合会の会長や念珠が関小型船主会の会長などの要職にあった。多忙な折りに時間をさき、ご協力とご指導をたまわったことに謝意を表するしだいである。

本調査地は上述した如く「念珠が関所跡」の史蹟として、あるいは鼠喰岩古戦場、八幡山古戦場として、さらには義経・弁慶一行ゆかりの地として有名である。また、民俗の方面からしても、巖島神社の祭礼「みこし流し」（四月一五日の祭礼に、前夜から精進潔斎した二〇数名の若者が白衣に身を包み、御輿をかついで集落内をまわったあと、鼠ヶ関川までくると川の中に御輿を流す）等、注目すべき行事もあるが、その他といえば、ごくありふれた、わが国の、海ばたの一集落にすぎない。こうした海ぞいの集落は新潟県の山北町方面から温海、湯殿浜と日本海側に点在しており、一見すると、なんの変哲もない集落にみえる。

しかし、調査をしてみてもわかることは、こうした集落がわが国における古くからの経済伝承を伝え残している点が多いことである。

それは、わが国における海ばたの村（浦磯岬の村）というものは、自給自足の生活を一步ふみ出したばかりのような暮らしむきが、ごくあたりまえであったことを思えば、こうした地域の生産・生業のあり方は始源的に近いといえる。それは漁撈活動だけにとどまらず、生産物を市場に出荷しない以前の経済伝承をも伝えてきたのである。

でも行ったということ聞いた。

船の先端のオダの部分に「御札」が祀られている船を見た。御札はエビス・ダイコクサマ、ウブスナの御札を祀ったり、高島に祀られているコンピラサマの御札を祀ることもあった。

その他、サザエは「四本ヤス」（カゴヤスともいう）で、上から付き取ったり、「四本ヅメ」ではさみ込んだりして採取した。イガイ・カキなどを採取することもあったので「イガイトリ」・「カキトリ」などの道具も船に準備していったことがあった。

五年ほど前（昭和五三年頃）から秋ダコを捕獲するのに「カゴ」を使用するようになった。餌はカニの他に魚の頭、スケソウやホッキといった魚の頭などを入れておく。カゴの大きさは三五センチほどのもの。

漁獲物の処理に関しては、イソミで捕採した魚貝藻類はイサバに売った。それを行商人が買い、行商人は村々を売り歩いた。生活が苦しく生計がたたない時は、イサバから前金を借りることもあったと聞いた。

（六）まとめ

この資料調査は著者が昭和五八年（一九八三）一〇月九日に実施したものである。調査の内容は同地温海大字早田^{わさだ}

秋に捕獲するアキダコ（マダコ）は「ガニザオ」と呼ばれる道具を使う。水深は深くても四尋ないし五尋のところにマダコがいるので、竹棹の先端にガザミと呼ばれるカニを付け、このガニザオでタコ穴を探り、タコをさそい出し、ヤスを用いて突きとる。竹棹の先端に赤い布を巻き付け、タコがいそうな穴の周辺を探ると、タコが足を出すので、突きさすこともおこなってきた。棹に用いる竹は、竹屋より購入した。

ガラス（箱）は、イソミをおこなうために用いる。板ガラスは明治二〇年頃より、この地で使用されるようになったという。「ガラス」使用以前は、天氣の良い、風のいい日を選び、海面にアワビの内臓（ワタ）の油をはじめ、サメの油、イワシの油などを振り撒き、海底の魚貝藻類を船上より見定めたという。こうした油は竹筒の中に入れて持っていく、ヤダケ（矢竹）の先端を細くつぶした道具を自製し、振り撒いたという。ガラス製の箱入メガネは「ガラス」と呼ぶだけである。

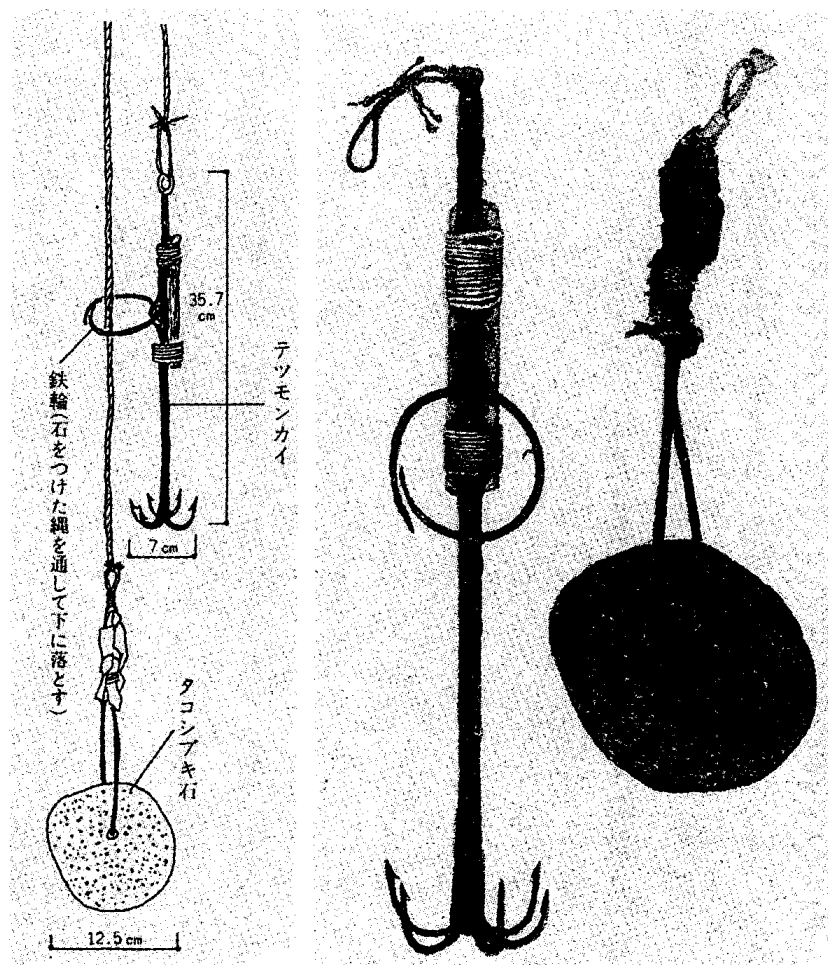
（五）漁船・その他の聞取り

イソミをおこなうために使用する小型の漁船を「イソミブネ」とよぶ。大きさは肩幅五尺、シキの長さ四尋二尺五寸、舳をミヨシといい、ハネダシより先の部分をオダといった。イケスは前フネ・後フネと二つに分かれており、後部をトコノマという。トモにもあたる部分で櫂を用いて操船するが、櫂を漕ぐ部分をケイビキという。「櫂ビキ」のことであろう。トリカジ側（左側）のトモについている。櫓を使うこともある。この船に帆を張って佐渡ヶ島ま

ス」を用いるが、普段は「三本ヤス」とあわせて船上に各一本ずつは用意してある。

オオダコを春に捕獲するためには、直径一〇センチほどの石のオモリを針金に縛り、下部は竹筒に通して餌のカニを付ける。カニは鉤に一匹のまま付け、これを海底におろす。そしてオオダコをさそいだすのだが、この道具を「タコシブキイシ」といい、さそい出したオオダコを捕獲するタコカギを「テツモンカイ」と呼ぶ。テツモンカイとは、出羽三山の一峰である湯殿山の行者の名前。ミイラ仏として信仰の厚い鉄門海上人のことで、この道具を漁師たちのために工夫、考案したのだと伝えられているのである。注(3)

オオダコはタコシブキイシとタコカギ（テツモンカイ）を併用して捕獲する。テツモンカイは碇状のカギなので餌のカニにまつわり付いたオオダコを水面に引き上げる途中でひっかける。カギを使用しないと、途中でオオダコが逃げてしまうことがあるからだ。



参考・タコシブキイシとテツモンカイ（タコカギ）
『技術と民俗』（犬塚幹士・小学館より）

アワビ採取は、船上より海底を覗き、岩礁に吸着しているアワビを剥すのだが、この漁具を「アワビヤス」という。普通は大きさの異なる大・中・小の三種類を用意しておく。「一番ヤス」とよぶ大きなアワビヤスは、先端の鉄製の筧の部分の長さが約四〇センチほどあり、最も長く重量もある。「二番ヤス」は長さが二〇センチ、「三番ヤス」は長さが二〇センチほどである。これらの鉄製の筧は少々反りがある。檣材の棹の先に上げて用いる。筧と棹をつなげる部分の金具をトツガネと呼ぶ。棹はアワビヤスを付けた先端の部分だけが檣材で、上部は杉材を用いたもので、棹の長さは作業をする水深にあわせて調節する。

タモは海底のアワビを掬い上げる時に用いる。船上よりアワビを採取する際、「アワビヤス」を用いて岩礁に吸着しているアワビを突き剥がし、そのあと「タモ」網を用いて掬いあげる。タモの大きさは直径・深さ共に二〇センチほどで、網の材質は麻材。柄は檣材を用いたものを使用していた。

「メトリガマ」と呼ばれる鎌を用いてワカメ採取をおこなった。このメトリガマと呼ばれる鎌はワカメ採取専用のもの。普通、農作業や草刈りに用いる鎌と比較して、刃の部分が短かく、刃の幅と厚さ（肉ともいう）もうすい。また、草刈り用の鎌よりは首の部分（さし込の部分）が長くできており、竹棹にすげやすくてきている。

「ヤス」は船上から海中・海底の魚類等突きさすために用いる。船上からアブラコを突き捕るために用いるヤスを「アブラコヤス」シンジョウを突き捕るヤスを「シンジョウヤス」といつて分けている。しかし、普通は「ヤ

上部は稻藁製の綱で縛る。また、目印を兼ねて樽を綱に縛っておくが、樽の直径はおよそ一尺二―三寸。

アジ・タナゴ巻網は三月初旬より四月中旬にかけて操業されてきた。この巻網は全長八〇尋ほどの網であるがイッパ（一束）一五尋から二〇尋の網を四―五束つなぎあわせて使用する。網の丈（高さ）は最も高い部分で一二尋、短い丈（高）の部分は五尋ほどの丈から二尋半ぐらいまで。一隻の小型漁船で一人で張り立てる。漁場は比較的海岸に近い浅場。

ハタハタ刺網は「定置網」とも呼ばれる。トビウオ網を「定置網」と呼ぶように、同じように使用してきた。一月二月は風の日が少ないが、時化は始める前になるとハタハタが沖から産卵のために浅場にはいつてきた。一日に二回ないし三回ほど操業。日中、ハタハタが二―三匹見えると、夜になって大漁に群でおしよせてくるが多かった。一二月のわずかな期間の操業であった。浅場では三尺から四尺の深さのところまでおしよせてくるが、その時期は波も高く、夜に網をあげるので危険をとまなう網漁であった。

（四）イソミ（漁法）と漁具

以下、イソミ（漁法）について、アワビをはじめとする捕採対象物、漁法、漁撈用具等について詳述し、「イソミ」の伝統漁法を明確にしたい。

イワシ流網によるイワシ漁は、五月中旬から六月中旬にかけて約一カ月間おこなわれた。漁獲するイワシの種類はオオバイワシ。イワシ流網漁をおこなう船は、多い時にはこの地区に一四隻もあつた。イワシ漁だけは百姓も大工もおこなつたという。大漁のときには肥料にした。

イソ刺網（磯刺網）は年中おこなわれていたが、特に四月・五月の二カ月間はアブラコ・シンジョウを捕獲するのに使用した。磯刺網は「サザエ刺網」の名でも呼ばれていたもので、六月ははじめから八月いっぱい夏の季節にはサザエや磯魚の他にアワビ等も捕採できたという。

トビウオ網は大正時代にさかんにおこなわれていた刺網である。「定置網」の名もあるがその理由は、一枚の網を「定置」に固定しておくもので、一般にいう「定置網」とは異なるものである。六月初旬から七月いっぱいまでの二ヶ月間が漁期。晩がた出かけて網を張り立てさして、翌朝網をあげる。

網は一張で二把（一把は三五尋から四〇尋なので、全長八〇尋ほどになる。）網の丈け（高さ）は四尋半。二五〇節（目）から三〇〇節（目）。この網を水深八尋見当で砂地の海底に張る。アバは桐材を用いて浮力を大きくした。（普通の刺網類はウルシ材のアバを用いた）。網の底部はドッペと呼ばれる土錘が付いており、網の両端の底部は石の錘で固定される。網の上部両端からも網を海底にのばし、カイデと呼ばれる木製の錨をうつ。このカイデは特別なつくりをした錨で、枝のある自然木の丸太を利用し、左右にのびた枝の部分を錨の腕の部分にし、左右にそれぞれ一つずつの石を紐りつける。この部分をカンザシと呼んだ。また下部には鉄製のツメを付けて錨がけとした。

ワビの殻は小型のものを使わないこと、イイダコは小さいので逃げられてしまう。また、サザエの貝殻を用いることもある。ヒトハリ（一張の長さは七尋から一〇尋）のものをいくつも継いで使用する。幹縄の前後にはウキ（浮き）を付けて目印にする。貝殻を用いる数が多い場合は全部で千個におよぶこともあったという。

アブラコ縄（アブラコ漁）とシンジョウ縄（シンジョウ漁）は、同じように五月初旬より六月下旬までの二カ月間おこなわれた。

餌には岩礁中にいるイワイソメ（イワムシという）を使ったり、ハヤムシ（フナムシ）を用いたりした。「ナワ」（縄）は直径二尺五寸ほどのうすい竹籠に入れ、五枚ほど持っていた。一枚の縄の枝には八〇本の釣鉤を七尺間隔で付ける。枝縄の長さは二尺ほど。朝がた縄を入れ、少し休憩してから揚げはじめた。

スズキ流釣によるスズキ釣漁は八月下旬より九月いっぱいおこなわれた。漁があれば一〇月にはいることもあった。スズキは夜間になると岸近くの浅瀬によってくるので、灯りも使わずに暗闇の中で「馬下」まおろし（地名）のあたりまで出かけた。明けがたにも釣れることはあった。この漁は夕食後に出かけた。小漁船のトモから三尺ほどの矢竹の細い竿を一本出し、水深の三倍ほどの長さに釣糸をのばして釣るが、この時は船を櫂で漕ぎながら移動させる。船を移動させる場合、深場では船をゆっくり漕いで移動させ、浅場では速く漕ぐ。餌にはイワイソメ（イワムシ）を用いた。釣りあげた（ツリアゲル）時、タモを使って掬った。

月中旬から一月中旬までの三ヶ月間おこなった。これからの「イソミ」をおこなう人達は年中をとおしてイソミだけの漁撈活動で生業をたてていたが、その人達は上述の通り限られていた。以上がイソミによる主な捕採対象物と漁期である。

「カイダコ」とは貝殻を利用してイイダコを捕獲することからつけられた名称。貝殻を海底に沈めておくと、その中にイイダコが入る。この地方では貝殻を用いてイイダコを捕獲することから、イイダコのことをカイダコと呼ぶのである。

カイダコ漁は四月初旬より六月中・下旬までの三ヶ月間おこなわれた。ホタテガイ・大型のハマグリ・アワビなどの貝殻を二個あわせて細い藁縄で縛り、海底に沈めておく。ア

山形県西田川郡温海町大字早田(鼠ヶ関)の漁業生産暦(新暦) ^も本間茂三郎氏聞書 (明治40年5月25日生)

魚種・漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	摘 要
イ ソ ミ			-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	アワビ・サザエ イガイ・カキ オオダコ ワカメ アキダコ
カ イ ダ コ			-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	イイダコ
アブラコ縄				-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	
シンジョウ縄				-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	
スズキ流網							-----	-----	-----	-----	-----	-----	
イワシ流網					-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	オオバイワシ
イソ 刺 網	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	アブラコ シンジョウ
トビウオ網							-----	-----	-----	-----	-----	-----	定置網
アジ・タナゴ巻網			-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	
ハタハタ刺網												-----	定置網

(昭和58年10月9日調査)

から交通の要衝であつた。

元和八年（一六二二）の酒井氏知行目録に「鼠関村」とみえ、村の石高は三六五石余。寛永三年（一六二六）の庄内高辻帳では高三七二石余。正保郷帳（一六四四―一六四七）では田方三五六石余・畑方一二石余と見えることから村高は三六八石余。このような史料から鼠ヶ関村は石高が三六〇石ほどの村であつたことがわかる。

また、式部群記に家数二二二とみえるという。「出羽国風土略記」に産物として、あわびかまほし、早田の早稲米とある。^{注(2)}

（三） 漁業生産暦と漁法

「イソミ」（磯見）は一般にいわれる「見突き漁」（覗突漁）のことで、「イソミブネ」（磯見船）とよばれる小漁船の上から海中・海底を覗き見て、アワビ・サザエ・イガイ・カキなどの貝類やワカメなどの海藻類を採取するほか、アブラコ・シンジョウなどの魚類やタコ等を捕採する漁法である。

アワビ・サザエ等の貝類をはじめ、アブラコ・シンジョウ・クロダイなどの捕採は一年中おこなうが、主に一月中旬から翌年二月頃までと、六月中旬から八月中旬にかけての季節。その他の時期はイソミによりオオダコの捕採を三月初旬から五月の中旬にかけておこなつた。オオダコは大きなものだと一〇キロ以上もあり、小さなものでも二キロほどはあつた。

オオダコ漁が終るとワカメ採取を五月一〇日の口明けから六月中旬までおこなつた。また、アキダコの捕獲を八

るようになった。

早田は調査当時（昭和五八年）、一四二軒の世帯数だが、それ以前は七〇軒ほどの家数がつづいてきたという。このうち専業の漁業者は一〇軒ほど。農業と漁業との兼業者が三五―六軒あった。農業といっても五反百姓がほとんどであった。早田の中でも漁業がさかんであった地区は羽越本線にそって、小岩川・浜中・宮名の順で、小岩川に対して浜中と宮名の地区を大岩川といった。本間、魚住の苗字は一軒だが佐藤、筒井、五十嵐の苗字は二―三軒ずつある。（地図参照）

上述の通り、この地域で裸潜水漁撈を伝統的にこなってきた人はいない。裸潜水漁撈者は新潟県の馬下周辺に
まおろし
限られていたという。

この地域の人々は大工や左官として出稼ぎに出ることが多く、北海道・東京・千葉・大阪を中心に各地に及んだと聞いた。話者も大工として出稼ぎに出ていたが不景気のために仕事もなく帰郷した一人である。定職がないので海に出て「イソミ」をすると、一日で大工の手間賃の三人前もの収益をあげることができたので、それ以来、本格的に「イソミ」をはじめて生業をたてるようになったのだという。

（二）地域の史的背景

現在の温海町鼠ヶ関・早田^{わさだ}は近世には鼠ヶ関村^{ねずけきむら}と呼ばれていたが、上述の通り、この村名は、古代の奥羽三関の一つ「念珠関」に由来している。この地は鼠ヶ関川の河口に近く、日本海に面し「浜街道」^{はま}の名がある通り、古く

[I] 山形県西田川郡温海町大字早田^{あつみ}（鼠ヶ関^{ねず}）の「イソミ」

(一) はじめに

山形県西田川郡温海町の「鼠ヶ関」は新潟との県境に近く、千数百年の歴史のある「念珠ヶ関」の趾地である。この地は、白河や勿来とともに「日本三大古関」の一つに数えられ、古くから知られた史蹟の地として有名である。

海岸にそった道路の山側に人家が点在し、砂嘴のようにのびた先端に「弁天島」があり、そこに祀られた海中出現の「弁財天」は藩政時代から庄内藩士酒井公が代々厚い信仰を寄せたといわれる神社である。

この神社は明治二年、安芸国の厳島神社より田心姫命・湍津姫命・市杵嶋姫命の三女神を分霊して祀り、「厳島神社」とよばれ



山形県西田川郡温海町大字早田（鼠ヶ関）
国土地理院発行 1：25,000

(1) 研究目的 (承前)

この地域における「イソミ」に関する事例は、わが国における「磯漁」が始源的（原始的・根源的）かつ伝統的な漁法で、海とかかわりあいをもつ人々の暮らし（生産・生業）のたてかたと、その基層文化を探るうえで、きわめて重要な事例であるとする側面を実証するためである。また、あわせて、それとは別に、まったく新しい暮らしのたてかたとして、海とかかわる生産・生業としての「イソミ」漁もありうるという事例を示すうえで、きわめて重要であるといえる。

すなわち、本事例は両極端の二つの要素を含んでいる点で注目される。

さらに、継続的な研究目的・問題の所在としては、島根県隠岐郡海士町北分（中ノ島）の事例と同様に、アワビ等を裸潜水漁の方法で捕採することのない一事例なのである。

本地域に最も近い場所で裸潜水漁をおこなってきたのは、筆者が調査した限りでは新潟県岩船郡山北町大字馬下であった。馬下では女達（海女）により、七月一〇日から八月下旬までテングサ採取等を裸潜水漁によっておこなうほか、九月から翌年の四月頃まで、男達により「イソミ」（磯見）がおこなわれていた。^{注(1)}

このような調査事例は全国的に広く分布していると考えられるが今日ではまだ不明な地域も多いため早急な調査が待たれる。

(2) 磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

△論文（民俗学）▽

日本磯漁伝統の研究 [Ⅲ]

— 磯漁民（見突き漁民）の漁撈伝承研究 —

目次

田邊 悟

(1) 研究目的（承前）

磯漁の伝統的存在形態に関する実証的調査と研究

[Ⅰ] 山形県西田川郡温海町大字早田（鼠ヶ関）の「イソミ」

(一) はじめに

(二) 地域の史的背景

(三) 漁業生産暦と漁法

(四) イソミ（漁法）と漁具

(五) 漁船・その他の間取り

(六) まとめ